
忘れた伝説と新たな伝説

horito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れた伝説と新たな伝説

【Nコード】

N5094Z

【作者名】

horito

【あらすじ】

忘れ去られた七つ人に残した封印としらず、意味も忘れて暮らす人々。

平和な時代に終わりが訪れ、古の混沌とした世界がやってくる。
新たな勇者は現れるのか・・・

プロローグ

一対の炎と氷を纏う双剣が在った。

全てを貫く神々しい槍が在った。

悪魔の魅力を持った禍々しい大剣が在った。

大地を揺るがす斧が在った。

絶対に外さない女神の弓が在った。

刀身を持たない太陽の光剣があった。

全てを平伏す魔力がこもった杖が在った。

いにしえ
古の時代：

それは、人も獣も魔物も生きるもの全てが、力を持った者に逆らえず命をなげだし従うしかなかった時代：

欲望が溢れ混沌とする世界を変えた七人の者達がいた：

かの者達が利用していた武器は神器と崇められてた。

昔話が伝説となり、伝説が神話とされるほど年月が過ぎた。

今や吟遊詩人さえ七人英雄のサーガを吟い継ぐこともなくなり、知る人も居なくなっていた。

月日は流れ…

人暦1328年

(初暦4862年 推定)

七人の者が世界を変えた日を初暦元年としている。

すでに忘れ去られた年号。

今は人族が大陸の半数を支配した日を人暦元年とし歴史を刻んでいる。

国の名前はエトラス王国。

町並みは中世ヨーロッパににている。

レンガ造りの家が綺麗に並んで建てられている。

石を削り出し引き詰めた道は、馬車や人の往来を考え舗装されている。

そこにそれらは在る。

いや、それら在るところに国ができたといった方が良かったらう。

王都の広場に大地を突き刺す七つの武器の彫刻が在る。

何故ここにあるのか？

何時からあるのか？

誰が造ったのか？

誰も知らない…。

触れる事、壊すことは禁じられていた。

誰が何のため決めたのかも忘れられていた。

実は王族・支配者のみ受け継がれる口伝がある。

それは…

『七つの封印を解くべからず…

かの者が世に戻れば世界が終わる…国ではない、世界が終わる…忘れることなかれ…

魂に刻み心せよ、この地を統べる者よ、七つの杭は触るべからず…』

どんな武力をもった王者も絶大な魔力をもつ賢者も、この地を納めてきた者達は、この事だけは伝え守ってきた。

何故、曰く付きの土地に国ができるのか？

国が滅びても、新しく国が興る…

理由は簡単、気候が安定して暮らしやすく、農作物は豊富に育つ、獣や魔物が近くに生息していない。
もしくは、近寄らない…。

大陸には人族が大半に広がり村や街を造り暮らしている。

街や村との距離は徒歩で1日〜3日ほどかかる。

人族は5つの大国に別れている。

国は、王と領地を持った人物が統治してる。

特定の地域を任される藩主・公爵等の地位の高い者が周辺の地域を領地としている。

広すぎて一括統治が出来ない為である。

国は、5つの大国だけでなく、小さな国も存在しているが、殆どが5大国どこかにの属国となっている。

全ての国を数えると、30以上はある。

昔は、度々争う事もあったが今は平和が続いている為、国を行き来することは特に制限されていない。

いつの時代も旅には危険が付き物で、盗賊や獣、最悪なのは魔物に遭遇してしまうこと。

獣は大概決まった地域に生息しているので街道自体が避けて作られている。

はぐれた個体に出会わなければ問題ない。

魔物に関しては、棲息場所等がはっきりしていない。出会ったら生存率は絶望的。

魔物とは、総じて魔力をもつ獣であり個体によっては知能があるちなみに、ドラゴンは最上級の魔物。

危険が付きまとう旅には、身を守る術が必要であり、自然と護衛を生業とする組織が発達している。
傭兵やガーディアンと呼ばれている。

1つの集団をユニオン・ギルド・軍団と称している。
特に制限や規制はないが色が付く名前だけは禁止されている。
さらに1つの集団には、人数や技能・装備品といった組織力でランクが付けられる。

エトラス王国でのランク分けは、分かり安く鉱石の貴重性や硬度にちなんで付けられている。

ブロンズ・アイアン・シルバー・ゴールド・プラチナなどである。

他の国では、宝石、星座に称されたりしている。

ランクの基準は国によってまちまちだが、大概はその集団で倒せる獣のランクによる。

商人達の旅には必ず長期・短期の契約をしている傭兵達がいる。
大富豪や特権階級の方々の私兵団を造り常日頃から護衛させている。

傭兵達は、武器と魔法を使って主人を守る。

武器は、剣・槍・斧・弓が主流で、魔法士がいる集団はランクも高く強い。

この世界は魔法を使うことができる。

魔法は、強弱を除けば全ての人族が使用できる。

ただ、生まれもった才能は如何ともしがたい。

自分のもつ属性と性質は変えることが出来ない。

この世界は平和に見えるが時代が変わる兆しが見え隠れしている…。

物語は始まった…。

ブログ（後書き）

週に一回更新できるようにやってみます。

お付き合いよろしくお願いします。

子供編 1

「父さあ〜ん！また、冒険者がやって来たよ〜」

カーーン、カン、カーンとリズム良く金属を叩く音が聞こえる工房から、すこし出た所にいる少年が、声変わりが済んでいない声で叫んでいる。

「忙しくなるな…」

少年に返事をするわけではなく呟くのは、鍛冶場の熱で黒く焼けた男で、毎日ハンマーを叩く職業柄、筋肉がしっかりとついている。顔は頑固に見える、威厳すら醸し出している。

「遊んでねえで母さんの宿の手伝いをしながら、こっちに誘導してこい〜」

「はい！」

初めての人が聞いたら怖じ気づいてしまうような、低く響く声に、年相応の元気な声で返事をする。

手に持っていた槍を棚に戻して、町で唯一の宿屋『月見邸』に向かって走って行った。

冒険者の一団が宿屋に入る少し前に滑り込むと、息を整え接客向けの笑顔の準備をする。

…カラアーンと扉を開ける音がして6人の男女が入ってくる。

「いらっしゃいませ」

最初に挨拶するのは、母の役目なので譲る。

端から見ても美人なのに、飛び切りの笑顔で出迎える。

冒険者達が母を見て、いい意味で動揺するのを確認したところで

「ようこそ月見邸へ、冒険者の皆様を歓迎いたします」

母と似た最高の笑顔と少年には似合わない大人びた口調で出迎える
と、冒険者達は母に釘付けになっていた視線をこちらに向ける。

「お世話になります」

リーダーらしい男が名簿に記帳を済ませ、一週間程度の滞在になる
ことつげ、朝夕の食事と人数分の宿代を払う。

部屋に案内するのは少年の役目。人通り案内し荷物を運び込んだ所
で、

「少し早いです、朝食はいかがですか？うちは、食事も自信があ
りますよ」

「商売上手だな」

「まったく、そんな笑顔で誘われたら断れないわよ」

「よし、先に行ってお勧め定食六人分準備してくれるか？」

「ありがとー10分程で作りますね」

一階に戻り母に伝えようとすると、すでに辺りにはいい匂いと肉を
焼く音がする。

「母さん、注文とれたよ」

「うん、ありがと」

いつもの事なのか、お互い驚いた様子はなく、手際よく六人分の食事を用意した。

「旨そうな匂いに我慢出来ずに、降りてきちゃった」

「本当にいい匂いね、期待しちゃう」

少し太めの男と細身の女が、揃って降りてきた。

間を空けずに全員食堂兼酒場に揃った。

「お待たせしました、自慢の肉盛り定食です」

少年は器用に3人分を運ぶと後ろから母が残りを運び、簡単に料理の説明を済ませると、緊張気味の六人に微笑みながら

「どっぞどっぞゆっくり」

と、挨拶を残して、厨房に消えた。

残った少年にリーダーが

「お前の母ちゃん、美人だなあ……」

「女の私も見いつちゃうわよ……」

「自慢の母ちゃんだろ？」

「うん、僕は母さんと結婚するんだあ、いいでしょ」

微笑ましい光景に和む六人は、食事をしながら少年に村周辺の情報を聞いた。

ほどよく情報を伝えて、厨房に戻っていた少年は、六人が食事を済ませる調度良いタイミングで、食後の紅茶を六人分運んでくる。

「食後の紅茶をどうぞ」

「サービスいいわね」

「よし、ほらチップだ」

「二へへ、ありがと」

少年はポケットにすっかりしまってから、先ほどの話の内容から村の先の鉱山へ鉱石の収集に来たんだなと当たりをつけていたのと、父の鍛冶屋へ誘導する為話しかけた

「皆さんは、鉱山へ収集にいかれるのですか？」

「そうだよ、良く解ったね」

少年はすでに良くできるかわいい子という地位を築いていたので、対応は思った通り

「うん、最近は沢山の冒険者が来るからね」

「そっか、そうだな最近有名になった鉱山だもんな」

「私たちも、新しい武器が欲しくて、軽くて丈夫といわれる鉱石“蒼い羽”又の名をブルーフェザーを集めに来たの」

「やっぱりね、あれで作った武器は軽くて丈夫でね、剣の刀身がね、うっすら蒼いく輝くんだよ」

「へえ、やけに詳しいね…、もしかして、見たことあるのかい？」
「なかなか扱いが難しい鉱石で製作が難しいはずだけど…私もまだ、見たことないし」

ここまででは予定通り、たぶんこの先も予定通り…

「もちろん、この村は昔からここにあるんだよ、鉱石は当たり前の材料として知ってるけど、武器を作るのは年に一度の山神様へ奉納のお祭りの時だけだったんだ…。」

でも、先月のお祭りの時に、たまたま冒険者の人が居合わせて…
広まっちゃったんだ」

「なるほどねー」

「神聖な鉱石だったんだね…」

「だから扱いが…、あつ…もしかして、この村の鍛冶屋なら扱える…？」

「もちろんだよ！ちなみに鍛冶屋は僕の父さんなんだ、ニへへ」

「「おー！」」

「「やったあ！」」

話を聞いてい他のメンバーも驚きと喜びの声をあげた。

「でも、作ってくれるかはべつ問題…だよ…」

「「えつつ？」」

喜んだままの表情で青ざめる六人…

子供編1（後書き）

次回は、一週間以内に投稿できればと思います。

感想などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5094z/>

忘れた伝説と新たな伝説

2011年12月17日10時01分発行